
迷えるカノジョとチキンなオレと

リプトン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷えるカノジヨとチキンなオレと

【Nコード】

N4056Y

【作者名】

リプトン

【あらすじ】

オレ、庭渡ニワト 理桜リオウは私立浪嵐学園で平和で平凡な生活を送っていた。だけど、幼馴染み兼親友で変な「体質」仲間のジローキンジロウこと坂町サカマチ近次朗キンジロウに巻き込まれ（？）、それを手放すことに……。あの時、ジローとさえ行動していなかったら……。orzオレとジローは執事の秘密を知り、お嬢様に弱点を握られた。さまざまな女の子たちと過ごす学園ラブコメディー。（処女作なので駄作間違いなしですがそれでも良いと言う方は是非読んでください。）

プロローグ

side ジロー
幼馴染みで親友の庭渡^{ニロト} 理桜^{リオウ}と一緒に登校している。俺はこいつの事をリオと呼んでいる。

リオ「なあ、ジロー」

ジロー「なんだ？」

門の前にはリムジンが止まっており、そこには浪嵐学園の有名人二人が立っていた。一人はこの学園の理事長の一人娘である涼月^{スズキ} 奏^{カナデ}。

リオ「なんでスバル様は執事なんてしてるんだろおな？」

リオはもう一人、燕尾服を着た近衛^{コノエ} スバル^{スバル}を指して、そんな疑問を投げてきた。

ジロー「今更な質問だな」

執事。そう、近衛スバルの職業は紛れもなく執事なのだ。あの燕尾服はコスプレなんかじゃないのさ。いや、ね。俺だって初めて聞い

たときは耳を疑いましたよ？ 執事って、なんだよそりゃ。「冗談じゃない。なんでそんな職業がこの現代社会に生き残ってんだよ。しかも普通に高校に通いやがって。もういっそのこと天然記念物にでも

リオ「メイドだよな」

ジロー「は？」

リオ「いやだつて……スバル様って……やるなら執事じゃなくてメイドって感じだろ」

ジロー「はい？」

俺は幼馴染みで親友の言葉に思考を中断させ、目眩を覚えた。

ジロー「おい、リオ。大丈夫か？」

いくら、スバル様が女顔だからってそれは失礼だろ。

リオ「……オレは正気だ……と思いたい……」

リオは自信無さそうに言った。この時、俺はリオがおかしくなった
と思った。だが、それは俺のおおいな間違이었다。そう、放課後
に思いしらされることになるのだ。

オリキャラ紹介(前書き)

オリキャラ・リオっちのプロフィールです

オリキャラ紹介

庭渡 ニワト 理桜 リオウ

(男)

身長 178cm

体重 57kg

容姿

- ・顔は中の上
- ・目と髪は灰色。学園時はカツラ(黒)+カラコン(黒)。
- ・髪型はツンツン。

特技

- ・家事全般
- ・リフティング

趣味

- ・昼寝
- ・料理
- ・読書
- ・サッカー

好きなもの

- ・ホットケーキ
- ・コーヒ
- ・サッカー

苦手なもの

- ・女性

・同性愛

*

・ 欧州系のクォーター。母親がハーフ。欧州系の血を強く色濃く受け継いでしまったので髪と瞳の色が灰色。目立つからと学園ではプチ変装している。

・ 名前は父（友理）の『理』と母（桜）の『桜』を合わせて付けられた。フルネームにコンプレックスあり。

・ とある事件に巻き込まれ、女性恐怖症となってしまうた。

オリキャラ紹介（後書き）

リオ「ずいぶんと内容の乏しい紹介だな」

リプトン「そこは『愛嬌』ってことで」

リオ「オレの性格とかは？」

リプトン「本編を読んでもらうしかないね」

リオ「いい加減すぎるだろ」

リプトン「しかたないんだって。ボクに文才がないんだから」

リオ「……はあ……先行き不安だけどみなさん、こんなんですがこの小説をよろしく願います」

第1話

side リオ

ジロー「なあ、リオ」

リオ「なんだ、ジロー」

ジロー「どうしてこうなった？」

リオ「オレが聞きたいぞ」

オレたちは今、理科室に籠城し、小声で会話していた。扉の前には机やら椅子やらでバリケードが形成されていた。

リオ「……ただ一つ言えることは……」

ジロー「言えることは？」

リオ「アイツに捕まればdead end直行、間違いない」

不穏な会話をしているよな？ けどしかたないんだ。今、オレたち

はこの学園で敵に回してはいけないトップスリーに入っているであろうスバル様相手にリアル鬼ゴッコ中なのだから。なぜ、リアル鬼ゴッコをしてるかって？ ジローがスバル様のパンツを見てしまったらしいんだ。運悪くオレもそこに居合わせていたので追われてるんだ。それで、殴ると言うスバル様の家に代々伝わるデンジャラスな執事流記憶消去術から全力で逃れなければならぬ。捕まったら記憶どころかオレたち自身がデリートされかねないからな。ってか、オレはなんも見えてないのに！

ジロー「し、洒落になってねえぞ」

リオ「洒落じゃない。マジだ」

オレは近くにあった人体模型（通称ジョニー）でバリケードを補強

「ドキヤッ！」

した瞬間、理科室に響く破碎音。ひどく嫌な予感を感じながら音のした方を見ると、そこには鮮やかに宙を滑空するドアの姿。スバル様がドアを蹴破っていた。様になってますねえ。

「うおおっ！？」

弾け飛んだドアをかわすオレとジロー。そして、がちやがちやと音を立てて床にぶちまけられるジヨニーの内蔵たち。うわぁ、悲惨だ。

スバル「追い詰めたぞ」

ジロー「うらあぁっ！」

理科室に入ってくるスバル様目掛けてジローは全力でジヨニーをフルスイングした。だが、それも虚しく

スバル「なめるな！」

怒号一閃。打ち込まれたスバル様の右ストレートがジヨニーの首から上を吹っ飛ばしていた。サヨナラ、ジヨニー。オマエのことは忘れないぜ。

ジロー「ふう……」

覚悟を決めたのかジローはゆっくりと拳を構えた。頭部をガード出来るよう両腕をしっかりと上げた構え。これはジローに最も向いたスタイル。そう、オレもジローもズブの素人ってわけじゃないんだな、これが。

スバル「やっとやる気になったみたいだな」

ジローに伝えるように、スバル様もファイティングポーズを取った。ちなみにオレはなんも構えない。だって、逃げるために体力温存しときたいもん。

スバル「今度こそ仕留めてやるぞ。ボクの『執事ナツクル』でな」

リ・ジ「……」

うわぁ、ダセエ。なんだよ、執事ナツクルって。

ジロー「どうでもいいけど、オマエってネーミングセンスないな」

スバル「なっ……何を言う！ かつこいいだろ！？ ほら、執事ナツクル！」

リオ「いや、かつこ悪いよ。執事ナツクル」

率直な感想を伝えてやると、スバル様は顔を赤くしてうつつと唸っ

た。

スバル「くう……こんな侮辱を受けたのは生まれて初めてだ。もう、許さないぞ。おまえたちには、ボクの必殺技を喰らわせてやる」

リオ「必殺技？」

スバル「そう、名づけて『エンド・オブ・アース』」

ジロー「スケールでえええっ！ 滅ぼしてんじゃん、地球うつつっ！！」

ジローの渾身のツッコミが決まった。

リオ「やっぱり、そのネーミングセンスはどうかと思うよ」

スバル「う、うるさいな！ ボクのネーミングにケチをつけるな！」

リ・ジ「……」

リオ「ごめん、オレたちが悪かったよ。オマエだって、一生懸命考

えただよな……」

ジロー「ごめん、俺たちが悪かったよ。おまえだって、一生懸命考
えただよな……」

スバル「ハモるな！　なんだその悟りきつた顔は！　そんな可哀想
なものを見るような目でこっちを見るなよ！」

くそう……　かつこいいと思ったのに……　一週間もかけて考えたのに
……　とスバル様は小さな子供みたいに口唇を尖らせて拗ねた。何？
この可愛い生き物……。

リオ「!？」

気付いた。スバル様の横にある棚。その上にある大きな硝子製のビ
ーカーが、今にも落ちようとしていた。

ジロー「避ける！」

ジローが反射的に体を動かしていた。不意に張り上げた声にスバル
様は口を開けてぼかんとしている。どさりとジローがスバル様を押
し倒した。そして、オレも落ちてきたビーカーをなんとか掴めた。

リオ「ふう……　ってあぶねえ!？」

安堵したのも束の間、他にもあったビーカーが時間差で落ちてきていた。オレは咄嗟に避けた。ビーカーは呆気なく碎け破片が散らばっていた。

スバル「きゃあああああっ！」

リオ「なんだ？」

女の子みみたいな甲高い悲鳴。

ジロー「こはあっ！」

振り向くとジローが宙を浮いていた。ビーカーの破片を避けるように理科室の床にダイブしていた。運の良いヤツだ。

リオ「ジ、ジロー？ オマエ、なんで鼻血が……」

ジロー「なっ、そんな、どうして……」

おかしなことに、顎を殴られたはずのジローは、なぜか真っ赤な鼻

血を出していた。ジローは女性に触られただけで、鼻血が出て、最終的には失神してしまうという稀有な体質な女性恐怖症だ。スバル様を見るとはだけた服からは案の定、胸が膨らんでいた。うん、確定だ。スバル様は女だ。やっぱりオレは間違ってたんだ！

スバル「 殺す！！」

スバル様が近くに置いてあった消火器を悠然と構えていた。

ジロー「ちょ、ちょっと待ってくれ近衛さん。そんなので殴られたら、記憶が飛ぶどころじゃすまない気がするんですけど……」

スバル「ああ、そうだ。おまえみたいな変態は、この世界にいちやいけないんだ……」

ジロー「じつ、事故だ！ あれは事故だったんだ！」

スバル「何が事故だ。ボクの……ボクの胸を触って興奮して鼻血まです出したくせに……！」

ジローは腰が抜けて動けないようだ。

ジロー「違うんだって！俺は興奮して鼻血を出したわけじゃない！これは俺の身体が」

スバル「問答無用。終わりだ。絶望を噛み締めながら、死ぬがいい」

「ごんっ」

鈍い音がしてジローが倒れた。スバル様はそれでも気がすまなかったのか連続でジローに消火器をぶつけ続けていた。

スバル「次はおまえの番だ。庭渡 理桜。覚悟しろ」

気がすんだのかターゲットがジローからオレに移ったようだ。いつものオレならスバル様がジローに気をとられてる間に逃げているはず。だけど、オレの身体は震えて言うことをきかなかった。

『さあ、僕〜。お姉さんと愉しいことしようね〜』

迫り来るはだけたスバル様の姿がオレの中の忌々しい記憶と重なってしまっていたから。

第2話（前書き）

紫苑さん感想ありがとうございます。

第2話

スバル「可哀想に……そんなに震えなくても大丈夫だ。一瞬で終わらせてやるからっ！」

そう言い、オレ目掛けてスバル様は全力で消火器をフルスイングした。

リオ「くっ……！ はぁ……はぁ……チ、クシヨ」

オレはなんとか頭をガードしたが威力が強すぎて吹っ飛ばされた。不幸なことにビーカーの破片のあった場所にダイブして腕をぱっくり切ってしまった。

スバル「……運の悪いやつだな。今ので気を失っていたらよかっただろうに」

本当に運が悪い。オレは切った左腕をきつく握りしめる。くそっ、頭が痛い……呼吸がしづらい……。

リオ「……た、たのむ……はぁ……」

くそつ、最悪だ。学園じゃ『こっ』はならないように気を張り続け
ていたのに!?

スバル「なんだ? 命乞いか?」

リオ「たのむ、から……はやく、ふくをととのえて、くれ!! は
あ……はあ……」

今、オレが出せる渾身の声を出すと、スバル様は自分がどんな格好
をしているのか思い出してくれたのか急いで整えてくれた。

スバル「……見たな」

整え終わるとスバル様は親の仇を見るような目をしてそう言った。
オレは見せられた側なんですけど!?! ……ああ、でもいつそのこ
と意識をぶっ飛ばされた方が楽だ。

スバル「おまえもあいつみたいにしてやるからな!」

スバル様が消火器を振り上げた瞬間、どこからともなく声がした。

「そこまでよ」

凜とした声が響いた。声のした方を見ると、スバル様の主である、涼月奏さんがいた。

スバル「お嬢様！！」

奏「スバル。消火器を置きなさい」

スバル「ボクにはこいつらを殺す義務が」

奏「スバル」

スバル「……わかりました」

主の命令には逆らえないのか、スバル様は渋々、消火器を床に置いた。

奏「そつちの坂町くんは大丈夫かしら？」

リオ「はぁ……はぁ……ジローなら、むだに、がんにょに、できて、るから、だいじょぶだ」

伊達にあのお方に鍛えられてないからな。

スバル「お嬢様。どうしてここに？」

奏「お花を摘みに行ったあなたがなかなか戻らないから、何かあったんじゃないかと思って捜しにきたのよ」

涼月さんがそう言うと、スバル様は申し訳なさそうに頭を下げた。

奏「庭渡くん、腕、大丈夫かしら？それに顔が真っ青よ」

リオ「……だいじょぶ、だよ」

嘘だ。かなり痛い。言葉も上手く紡げない。身体の震えも頭痛も収まらない。オレはネクタイをはずし、腕に巻こうとしたのを止められた。

奏「駄目よ。そのままだといけないから保健室で消毒しましょう」

リオ「……ほけん、しつ、いくまでのあいだ、だけでもしけつ、し

たい。ジローも、はごば、なきゃいけな、いし」

奏「そう、それなら私が」

リオ「!? いらない！ じぶんでやるからオレにさわらないでくれ！」

涼月さんがオレの手をとろうとしたが咄嗟に怒鳴ってしまった。

スバル「おまえ、お嬢様に向かって！」

奏「いいわ、スバル」

スバル「ですが！」

食って掛かるスバル様を涼月さんが手で制してくれた。

リオ「……悪い。オレを心配してくれているのはわかるけど、今は逆効果なんだ。だから、放っておいてくれ」

だいぶ呼吸が落ち着いてきたから普通に話せるようになった。オレ

はワイシャツを脱ぎ、傷口にハンカチをあて、その上からネクタイをきつく巻いた。

奏「それはできないわ。私の執事があなたに怪我をさせた。それくらの責任はとらせてもらわないと」

リオ「……わかった。なら、保健室に行こう。オレも聞きたいことがあるし、そつちも聞きたいことあるんだろっし」

奏「話が早くて助かるわ」

オレはジローが汚れないように血塗れになった手をワイシャツでくるみ、ジローを抱えて保健室へ向かった。

×
リオ「失礼します」

奏・ス「失礼します」

ジローを抱えたまま保健室の扉を開けるオレに涼月さんとスバル様が続いて入る。

仲本「どうぞー……って、庭渡君、どうしたの！？それに坂町君も！？」

リオ「……とりあえず、ベッドを借りてもいいですか？」

仲本「いいから早く坂町君を寝かしてこっちに座って！」

リオ「はい」

仲本「何をしたらこうなるの！？ 顔の方はたいしたことはないけど……腕の方は何針か縫わないといけないわ！ 今すぐ病院に行かないと！」

リオ「……病院は行きたくないです」

仲本「あなたの病院嫌いは知っているけど、今はそんなこと言うてる場合じゃないでしょ！？」

奏「……少しよろしいですか、仲本先生？」

仲本「なにかしら？　今は庭渡君の手当てを」

奏「彼らは私に任せてもらえませんか？」

仲本「けど……え？　きゃあ」

リオ「え？」

涼月さんはあることか仲本先生を往復ビンタした。……それも札束で……。どういうことだ？　あの浪嵐学園男子の憧れの涼月奏が……。ヤバイ、目眩が……。

奏「さて、邪魔者は退散したわね」

スバル「……お嬢様……」

オレがトリップしてる間に仲本先生は保健室から出ていったみたいだ。うん、ジローには悪いがオレも退散しよう。オレはそう決め行動に移ろうと出口へ向かった。

「だきっ」

リオ「ひいつ!?!」

突然、後ろから抱きしめられたことに情けない声を漏らしてしまっ
た。背中に殺傷能力最大の二つの凶器が押し付けられてるんですけ
ど!?! やばい……全身に悪寒が……。

奏「どこに行くつもりかしら?」

涼月さんがオレの耳元で囁くようにそう言う。うわっ!?! ゾクゾ
クするう!

リオ「ちょ、ちょっと……かばんをとり」

あ、もうムリだ。うん。むしろここまでもったことに驚きだよ。よ
く頑張ったな、オレ!

スバル「え? お、おい!」

限界を突破したようでオレの身体から力が抜けて、糸が切れた操り人形のように呆気なく倒れた。慌てるスバル様の声を聞きながらオレの意識はブラックアウトした。

第3話（前書き）

お気に入り登録してくれた皆様ありがとうございます。

第3話

リオ「く、来るなあああ！」

唐突に意識が覚醒した。横になりながら、ばくばくと拍動する心臓を左手で押さえつける。そう、あるうことが自分の上げた悲鳴で目を覚ましていた。カツコ悪すぎる。

リオ「……なんて、サイアクな目覚めだ」

サイアクだ。あの悪夢を見るなんて。

リオ「う……っ!？」

ヤ、ヤバい!?! 胃からリバーシ信号が!! 周りを見るとゴミ箱を発見した。すぐに取らないと。俺はすぐさまゴミ箱を取るうと右手を動かした。だが、突然、ジャラっと言つ音と共に、右手の動きが止まる。

リオ「……ジャラ？」

これって、手錠……ですよな? なぜにオレの右手とベッドの柱を

しっかりと恋人同士のように繋いでるんだ？ オレ、拘束プレイはあまり好きじゃないんですけど？

リオ「……………」

えーっと、なんですかね。ひょっとして、オレはまだ夢を見ているのか。そんなことはとりあえずどうでもいい！ このままじゃゴミ箱が取れないじゃないか！？

リオ「……………っ!？」

マズい！ リバース！ リバース信号が赤になりかけてますから！
！ マジで喉までできてますからあ！！！！！

「リオ、早くこれに吐け！」

そんなジローらしき声の言葉とともにゴミ箱がオレの目の前に出現した。オレはゴミ箱をしっかりと持ってリバースを行った。

リオ「……………ゲボツ、ゴホツ……………!？」

ジロー「二人とも悪いけど」

「わかってるわ」

誰かが出て行く気配がしたけど、今のオレには気にする余裕はない。

ジロー「全部出して楽になれ」

ジローはオレがこうなるのに慣れてるから優しく背中を擦ってくれ
る。やはり持つべきものは幼馴染みで親友か。

ジロー「もう、大丈夫か？」

リオ「あ、ああ」

あれから十分くらい吐き続けたか……。事後処理も終え、ジローが
窓を開けながら心配そうに訊くので、力ない笑みで返す。

ジロー「そうか。……涼月、近衛。もう大丈夫だから、入ってきて
くれ」

涼月さんにスバル様？　なんであの二人がオレの家に……って、こ

こは俺の家じゃなく、オレが意味嫌う病室じゃないか。

奏「庭渡くん、大丈夫？」

スバル「……………」

ジローが呼んだ人物が入ってきた。スバル様は気まずいのか無言だし。

リオ「……………ジロー」

ジロー「リオのことを頼むよ。俺は何か飲み物、買ってくるから」

ジローに状況説明を頼もうとしたが、あるうことが視線を反らし、出て行きやがった。

奏「スバルも行ってきて」

スバル「かしこまりました」

涼月さんに言われ、スバル様はジローを追いかけていった。待つ

てくれ！ ちよっ！？ オ、オレを女の子と二人つきりにしないでくれえ！！

奏「大丈夫かしら。その手錠、痛くない？ サイズ的には小さくないと思うんだけど」

リオ「……ん？」

ちよっと待て。この女、今何気にとんでもないことを言わなかったか？

奏「安心して、庭渡くん。手術は、無事成功したわ」

リオ「……なに？ それならオレも改造人間の仲間入りなのか！？」

奏「そうよ。あなたはもう普通の人とは違うわ。試しに『変身っ！』って叫んでみて。それであなたに秘められた力が解放されるから」

リオ「な、なんだと！？ よ、よし！ わかった！ いくぞ！
って、やるわけないだろ！？」

オレは途中まで合わせていたがさすがにその先はないだろ？ 恥ず

かしすぎるって。高校生にもなつて「変身っ！」とか叫んじゃったらさ。そんなヤツがいるなら是非見たいね。

奏「く、あはは……」

笑い声が聞こえる。信じられないことに、あの涼月さんがお腹を押さえて、窒息死しそうなくらいに悶えていた。

奏「く、ふふふ。いいノリツッコミね」

コイツ、本当に涼月奏さんなのだろうか？ いつもとは印象が違すぎるんですけど……。

奏「でも、残念だね。ジローくんみたいに叫んでくれると思ったのに」

……あ、いたんだ。しかも、かなり身近に。さすがだな、ジロー。オレはオマエを侮っていたよ。

リオ「あ、あの……涼月さん？ ちょっと訊いてもいいか？」

奏「ふふ、何かしら庭渡くん。それともクラスのみんなみたいに」

リオ『 って呼んだ方がいいかしら？』

ジロー「別に呼びやすい方で呼んでもらって構わないけど……」

奏「ありがとう、リオくん。訊きたいことはいっぱいあるでしょうから、ゆっくりでいいわよ」

リオ「じゃ、じゃあ、訊くぞ？ オレのことを繋いでのって、アンタ？」

奏「そうよ。あ、心配しないでね。私だって怪我してる左手一本のあなたに犯されるつもりは毛頭ないから」

ジロー「アンタはオレをどんな人間だと思ってんだよ！ そんな心配してねえよ！！」

誰がそんなことするか！ 悲しいがオレにそんなことできるわけねえんだよ。

リオ「……そういや、手術って本当にしたのか？」

オレは丁寧に巻かれた包帯を見て呟く。

奏「ええ。ここは涼月家が経営してる病院だから最高のスタッフにやらせたわ。傷痕は残らないから安心して」

リオ「そうか、なんか面倒掛けたみたいで悪いな。治療費は後で必ず返すよ」

奏「いらないわ。あなたが私のお願いを聞いてさえくれれば」

涼月さんは静かに口唇を歪めた。……怖っ！　なんかすごい怖いんですけど！！

奏「そうね、最初はもちろん去勢」

リオ「待った！　何が望みだ涼月さん！　俺にできることならなんでもするぞ！」

認識を改めよう。コイツ、ただのお嬢様じゃない。ただのお嬢様が、こんなふざけた性格してるわけがない……！　ってか、お願いが去勢っておかしいだろ！？　しかも、もちろんって言ったぞ！

奏「勘違いしないで。あなたが私にできることなんて何も無いわ」

はつきりと涼月さんは断言した。いや、まあ、そうなんですけどね。オレが何かできるだなんてこれっぽちも思えませんでしたけどね、本当。

奏「あなたを拘束しているのは、あなたが私の執事の秘密を知ってしまったからよ」

ああ、やっぱりか。コイツとスバル様がいる時点で薄々そうじゃないかって思ってたんだ。

第4話（前書き）

KENさん、感想ありがとうございます。

第4話

リオ「なあ……なんでスバル様って男の格好で学園に通ってるんだ？」

一番の疑問を訊ねた。コイツなら、全て知っているはずだ。否、知らないはずがない。なんたってスバル様の主なんだから。

奏「強いて言うなら、家庭の事情ね」

リオ「家庭の事情？」

奏「ええ。あの娘の……スバルの家系の男子は代々私の家に執事として仕えてきたの。だから、あの娘も執事をしているのよ」

家系の男子？ ってことは、スバル様は……。オレの中である答えが導き出された。

リオ「そうか。それならしかたないか」

奏「あら？ これだけで納得できたの？」

涼月さんが意外そうに訊いてきた。

リオ「納得はできない。だけど、家庭の事情なんだろう？ スバル様とあまり親しくもないオレが深く訊いていいことじゃないだろう」

奏「それもそうね。話を戻すけど、私の父　つまりこの学園の理事長が、スバルが私の執事である為の条件を出したのよ。その条件が、三年間、誰にも女だと知られずに学園生活を終わるといふもの。つまりそれくらいのができないようじゃ女に涼月の執事は務まらない。きつとそう言いたかつたんでしょうね」

リオ「……え？　ちょっと待った。それってつまり……」

奏「そう。スバルは今日、あなたたちに自分が女であることを知られてしまった。あの娘は自分が涼月の執事であることに並大抵じゃない拘りを持つてるの。だからあなたたちの口をどうにか封じようとした。……ごめんなさい。私の執事が迷惑をかけたわ」

リオ「……」

そうだったのか。だから、あんなにオレ達を殺そうと必死になつてたんだ。いや、だけど、あれはれっきとした殺人未遂だぞ。犯罪者になつたら意味がないだろ。

ジロー「ほら、近衛。早く行けって」

スバル「だ、だけど……」

リオ「ん？」

ドアの方を見るとジローとスバル様がなんか押し問答していた。

リオ「何してんの？」

スバル「……あ、あの!？」

リオ「なに？」

スバル「う、ごめんなさい!」

リオ「は？」

スバル「あのときは動揺してて……本当に悪気はなかったんだ。そ

の、だから……怪我をさせてごめんなさい!」

リオ「……」

おいおい、あのスバル様がオレに向かって頭を下げてんぞ。ゲキレアじゃね？

リオ「……イヤだ」

オレは低い声で呟いた。

スバル「え？」

リオ「……ジローは見たところ傷がなさそうだけど消火器で頭を殴られてるんだ。この後、どうなるかわからないんだぞ。眠ったら、二度と目が覚めないかもしれない」

ジロー「怖いこと言うなよ」

リオ「それにオレはこのザマだ。謝っただけで済まそうなんて虫が良過ぎるだろ」

スバル「えっと……それは、その……」

リオ「こつち来いよ。一発で済ませてやるから」

オレが拳を作るとスバル様はビクツとするが、覚悟を決めたのかオレの腕が届く距離に来た。流石は男装執事だな。

リオ「良い度胸だ。……いくぞ！」

スバル「……ッ!？」

スバル様は歯を食いしばってる。

スバル「……?」

だが、覚悟した衝撃が来ないことに目を開けて首を傾げる。

「パシンッ!」

そんなスバル様にオレは渾身のデコピンを放つ。

スバル「いたっ！」

リオ「ほら、今回はこれで赦してやるよ」

スバル「?.....??」

スバル様は額を両手で押さえて不思議がっている。ドチクショー！
メチャクチャカワイイんですけど。

リオ「だから、今回はデコピンで赦してやるって言うてるの。ただどな、いくら秘密を守るためだからって暴力に走るのは止めるよ。次やったら、本当にぶん殴るからな！」

スバル「う、うん」

リオ「わかったならよし！」

、 ナデナデ

オレは安心させるように笑顔でスバル様の頭を撫でる。おーやっぱ

り、女の子の髪だー。撫で心地最高だな。

スバル「!?!?!」

ジロー「リオは相変わらず女に甘いよな」

オレとスバル様のやりとりを見て、ジローは呆れ気味でそう言った。

リオ「親父と母さんからの教えを破るわけにいかないからな。女性には優しくあれってな。暴力なんてもつての他だ」

奏「……ふうん……」

リオ「な、なに? どうし」

静かだと思った涼月さんが目を細めてオレを見ていた。ヤな予感だったので涼月さんに訊こうとしたら……あろうことか、涼月さんがオレの腰辺りに馬乗りしてきた。

リオ「!?!」

呼吸が止まる。軽い。鳥の羽のようだとまでは言わないけど、涼月

さんの身体は思ったより軽かった。

リオ「……ちょ、ちょっと！ 何してんですか、アンタは!？」

奏「なにつて、リオくに馬乗りしただけよ」

長い見とれるくらいに綺麗な髪をいじりながら、涼月さんは唇下がりのコーヒープレイクのごとく落ち着いてらっしゃる。対するオレは酸欠寸前の金魚みたいに口をパクつかせていた。というか酸欠ツス！

奏「リオくん。あなたつて、特殊な体質らしいわね」

、ギクツ、

奏「ねえ、黙っているつもり？」

涼月判事による臨時裁判が開廷。被告人はもち、オレ。こうなったら黙秘権だ。拘束されて動けない以上、屍のように無口になってこのピンチを乗り切るしかあるまい！

奏「別にいいわよ。それなら 身体に直接訊くから」

リオ「は？」

驚くオレの腰の上で、彼女は口元を歪めた。その白い指がオレのシヤツのボタンを次々と外していく。

リオ「お、おい！　なんで服を脱がすんだよ」

ヤバい、ヤバい！　発作が！　頭痛えし、呼吸が！！　身体が尋常じゃないほど震えてますからあ！！

奏「静かにして。手元が狂って内蔵を傷つけちゃうかもしれないでしょう」

リオ「さりと、こわいこと……いうなや！」

奏「ちなみに、私の握力は片手だけで八十キロを超えるわ」

リオ「あきらかに、ウソ、ですよね！」

呼吸しづらい上に大声出してるせいかメツチャ体力がなくなってる

ような気がする。

奏「ふふ、バレちゃった。でも、大丈夫。私の家に代々受け継がれた拷問法の中に、肋骨を一本ずつ」

リオ「やめっ！ わかった！ もう……わかったから、オレにふる、のは、やめて、くれませんかねえ……っ！」

魂を込めた絶叫も、無情にも涼月さんには届かなかつたらしい。はだけたシャツの隙間から、白い指がオレの肋骨の上をへびみたいに這っていく。細い指先。冷やかなその体温に、心臓が跳ねた。

ドクンッ！

あ、ヤバい、マズい。体温が急激に下がっていく感覚の中、涼月さんに触れられた箇所だけが熱を持った。……はい、アウトォー！

第5話（前書き）

あきさん、紫苑さん感想ありがとうございます。

第5話

奏「え？」

涼月さんの唾然とした声が漏れた。そりゃそうだろう。自分の触れた所だけが異常に赤くなり、火傷するほどの熱を帯びているのだから。ちなみに、オレは脱力感からボクとした感じで涼月さんを見ている。しかも、蕁麻疹が出たところが異常に痒い。

奏「……本当にジローくんの言う通りだったのね。ジローくんのもだけど、アレルギーだとしたら訊いたことがない症状よね」

リオ「って、しってて、はあはあ……やった、のかよ……」

奏「だって、確かめる必要があるでしょう？ 激しい頭痛、身体の震え、過呼吸、蕁麻疹。ひどいときは戻ってしまうんでしょう？ 女の子に触れられただけでこんな症状が出るなんて信じられなかったのよ」

この人は悪魔か？ いや、そんなカワイイもんじゃないな。魔王だ。これからはサタン涼月と呼ぼう。

リオ「……ジロオ、オ、マエ#」

ジロー「……しかたなかったんだ」

リオ「しかたないで……はあ……すますな。はあ、もういい。ジロー、から……オレのことは、きいたんだろ？ あえて、オレか、らは……せつめいしない、からな」

奏「ええ。つまり、こういうことでしよう。あなたは、女の子に触れられるのが怖くて怖くて仕方がないチキン野郎なのね」

リ・ジ「ぐ……」

グサツと心臓にナイフを突き立てられた気分だった。ジローも同じのようだ。齒に衣を着せないタイプだな。直球過ぎません！？

奏「ねえ、そうでしょう？ 庭渡 理桜くん」

リオ「!?!」

こ、このタイミングでフルネームだと？ ま、まさかこの人……気付いたのか？ オレの名前の秘密に……！ いや、そんなはずない。オレのはジローみたいにストレートじゃない。わかるヤツはよっぽ

ど性格がヒネくれてる。

奏「どうかしたの？ 何か言ってよ、庭渡 理桜くん」

リオ「……………」

奏「ニワトリオウくん？」

リオ「……………」

奏「ニワトリ、オウくん？」

リオ「……………」

奏「チキングくん？」

リオ「うわあああああっ！」

耐え切れずに、オレは絶叫していた。

スバル「チキング？」

リオ「ヤメロ！ そのなで、オレをよぶなっ！」

ジロー「リオも俺と同じなんだよ。庭渡理桜。ニワトリ、オウ。ニワトリを英訳すると？」

スバル「……チキン……」

ジロー「オウは王様でキング。それを合わせてチキング。曲解だけど、チキンの王様だ」

オマエだけには言われたくないわ、ジロー！

奏「ところで、リオくん」

急に涼月さんの雰囲気が変わった。

奏「あなた、自分の恐怖症を治したいとは思わない？」

リオ「……そりゃあ、オレだって……はあ……なおしたいよ」

この体質が治らない限り、オレのささやかな夢も叶えられないからな。

奏「だったら、手伝ってあげましょうか？」

リオ「それは、ありがたい、けど……。なにが、のぞみだ？」

奏「リオくんは頭の回転が早いのね」

リオ「どうも。で？」

奏「スバルが女の子だってことを、誰にも言わないで欲しいの」

たとえ死んでもね、なんて物騒な言葉が付け足された。要はオレがスバル様の秘密を死守する代わりに、涼月さん達はオレの女性恐怖症を治す手伝いをしてくれるってな。

奏「あなたたちがスバルの秘密を知ってしまったことは、まだ父の耳に入っていない。あなたたちが秘密を守れば、私たちが条件を破ってしまったことを知られることはないわ」

リオ「いいふらす、しゅみなんて……はぁ……ないけ、どぞ……メ
チャ、ふせい、はぁはぁ……ですよね？」

奏「バレなければいいのよ。どう？ 私たちと協定を結ぶ？ ちな
みにジローくんは協定済みよ」

リオ「きょうてい……はぁはぁ……って、いうより、きょうはんだ
な。でも、ことわったり、したら……はぁはぁ……ふじの、じゅか
い、いき、だろっし……オレたちが、スバルさまの、ひみつを……
バラしたら、オレたちが、バラされるんだろっし……」

もう、喋るのもしんどい。つか、早く退いて欲しいんですけど。ジ
ローにアイコンタクトをする。

ジロー「……リオも涼月の話に乗るって。リオ、近衛は主の命令に
従うらしいぞ」

リオ「おう」

ジローはオレの気になってることを言ってくれた。なら、安心か。

奏「ふふ。じゃあ決まりね」

なぜか涼月さんはやけに楽しそうに笑っていた。うん、やな予感しかしないよ？

奏「ところでリオくん。訊きたいんだけど、あなたの女性恐怖症の症状ってどんな時に出るの？ 出てからも女の子に触られ続けたらどうなるの？」

リオ「え？ ん、しょうじょうがでるのは……ふいうちで、ふれられたときと……ちょじかんで、きょくどの、せっしょくじ、かな？」

それと、言わないけど半脱ぎで迫られたりしたらマジでヤバいね。触れてないのに発作が出るからな。これだけはジローよりもチキンなのを認めよう。

ジロー「さわられつづけると、たえきれなく……なつてしっしんするね」

ジロー「……リオ、ご愁傷さま」

事実、保健室で涼月さんに抱きつかれて失神したしな。それとジロー、なに手を合わせて不吉なことを呟いていやがる！

リオ「けど、それがどう」

と。そこまで言っただけでオレは黙った。正確には黙らせられた。涼月さんの指が、再びオレの肋骨に伸ばされていた。

リオ「あ、あの、すすつきさん？」

奏「心配しないで、リオくん。これは実験よ。今後の為にも、あなたの身体がどこまで耐えられるのか試さなくちゃいけないの」

三日月のように笑うサタン涼月。ヤバい。コイツ、明らかに面白がってやがる。

リオ「や、やめっ！　そんな、ことしなくても……ふ、ひあんっ！」

奏「うふふ。ちょっと触っただけなのに可愛い声を出すのね」

細くて長い指がわきわきと肌の上を這いずり回っていく。……ダメだ。傍から見れば天国のようなシチュだが、女性恐怖症　チキン症候群のオレにとってはただの拷問だ！　視界はすでにブラックアウト寸前。このままだったら魂があのお世へ旅立つ。

リオ「た、たすけて、くれ、ジロー！ スバルさま！！ このまま、
じゃ…… ホントに、ムリ！」

掠れた声で精一杯、二人にSOSを出すか

ジロー「スマン、リオ。俺には荷が重い……」

スバル「……ボクは執事だ。お嬢様の命令は絶対なんだ」

目を反らされた。

リオ「そんなこと、いわずに！ たのむから……オレを、みすてな
ひゃああんっ！」

奏「あら、リオくんだったらこんな所に切り傷があるのね。それにジ
ローくんの家族に鍛えられてるだけあって身体が締まってる。これ
なら、失神した後も楽しめそうね」

うふふつ、と響き渡る笑い声。何を楽しむつもりなんだよ！

……ああ、今日からこんな生活がオレの日常になるのか。徐々に遠
のいていく意識。その中で、オレは神様に自分の貞操の無事を祈っ

て
お
い
た。
。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4056y/>

迷えるカノジョとチキンなオレと

2011年11月20日19時45分発行